## 安芸国大水

広島は瀬戸内海に面し、それに注ぐ太田川のデルタに発達した街である。

江戸時代、太田川は奥地から広島へ物資を運ぶ 川舟が行きかい、中国山地の原生林から伐採した 巨木をいかだに組み、流下していた。

したがって、広島は太田川によって恩恵を被っていたが、反面、台風の季節や雨季になると、その地理的条件によって、ほとんど毎年、大小の洪水や高潮の被害に見舞われた。

大被害を被った洪水として、承応2年(1653)8 月5、6日の大洪水(死者数しれず、流没家屋5,100余、牛馬流失280余)、また、寛政8年(1796)6月5日の大洪水(田畑損亡131,433石、流失家屋566、潰家1,104、死者169、牛馬流失40)、そして、嘉永3年(1850)の大洪水等が挙げられるが、これらの洪水は町民の生活を苦しめると共に、藩の財政に大きな打撃を与えることともなった。

寛政8年大洪水の翌9年には、水難防止についての詳細な藩令が出されている。

- ○洪水の際は、浦辺、島方よりも救助船を太田川 の河口に出して、人命、牛馬の救助に当たり、 川沿村落の船主は救助船を用意すること。
- ○平素より、橋りょうの上流に、いかだ・木材の 類をけい留しないこと。
- ○材木場の水位が1丈1尺に達したら、御作事方 吏員や棟梁大工などは、既定の橋りょうや材木 場に行き、川筋の検分や流材の整理等に当たる こと、その他。

こうして、武士も町民も一体となって水害対策 にとり組んだのである。 その54年後の嘉永3年6月、再び広島を大洪水が襲った。

同年5月中句より連日雨が降り続き、28日になって大雨となった。6月1日夜、あちこちの橋が 濁流に押し流され、2日暁刻には市中の諸川が氾 濫、各所の堤防が決壊した。

広島の北部、東部では、濁水が全村を浸し、崩倒・漂流する家も少なくなく、まるで湖沼のようであった。広島城下では、堤防潰決22、士民邸宅の崩壊142、流失家屋は31にのぼり、ことに西部の被害が甚大であった。浸水は軒下1尺に及び、道の狭い所では往来の舟が軒をこわし、格子や蔀戸を破るものも多く、人々は2階の窓口より屋上にはい出て、救助船に乗り移った。南部の新開地では、市街地に比べて土地が低いため、市街地から流下した潴水により軒上まで水が来て、広大な湖水が出現したほどだった。たまたま水難を免れた所でも、城内本丸を除く他は水深1尺余となり、場所によってはももまで入る所もある。3日夕刻までは水の溜っていない所はなかった。

この洪水で、田畑損耗 129,078 石余、流失家屋 170、崩壊家屋664、死者38を数えた。

寛政の水難防止策が効いてか、救助には町奉行 の数十隻の救助船が当たり、逃げ遅れた人々を乗 せて附近の社寺境内に収容した。避難者が多くど この境内も足の踏み場もないほどだった。

また、堤上に逃げた者数百人を、草津村・井口村の住民が漁船で救出し、同村の寺院に収容して 多くの人々が救われたという。

(出典: 庸島市史ほか)





安芸国大水図(早稲田大学演劇博物館蔵)